

シリーズ 私の一冊の本

経営情報学部 国保祥子 先生

デイジー・ウェイドマン 著 『ハーバードからの贈り物』

閲覧室 1階 159/W 12 武田ランダムハウスジャパン 出版

「私は経営学の研究者として、マネジメント（経営）という感覚が一般的でないところに、マネジメントを適用する研究をしています。元々マネジメントとは効率的な目的達成のために開発されてきたツールであり、利益最大化を目的とするケースが多いものの、非営利組織がより効率的な運営を行う行動もマネジメントです。その中で、マネジメントを行うリーダーのよしあしで組織が幸せになったり不幸せになったりするのを見てきました。そのため現場を統括するリーダーに適切なマネジメントの研究と教育を行うことで、生き生きと働く現場の人を増やしていきたいと考えています。

ところで「リーダー」というと、多くの人は組織のトップではない自分には無縁だと考えがちです。しかしリーダーとは、リーダーシップを発揮する人のことであり、リーダーシップとは影響力のことです。役職に関わらず、影響力をうまく行使することで誰もがリーダーとなる要素は持っています。そしてリーダーシップに関する私の座右の書が、この本です。ハーバード・ビジネススクールでは、講義の最後の1コマを使って、学生すなわち未来のリーダーに向けて教授陣が訓話を贈る慣習があり、本書はその訓話を収録したものです。これから社会に羽ばたいてゆく教え子たちに、ビジネスやアカデミックのフィールドで多くの実績を積んだ教授陣が、自らの経験に基づいたエピソードを添えて、「自分はどのようなリーダーでありたいのか」を考えるきっかけを与えています。

私は、目指すところが分からずに迷いの多かった20代の頃に本書と出会いました。自分がリーダーに値するとは考えていませんでしたが、社会とどのように関わっていきたいかの指針をこの本にもらいました。本書には15の訓話が載っていますが、面白いことに自分の状態によって心に響く章が異なります。以前は理解できなかった章が後日読むと腑に落ちることも多く、いつしか自分の成長の定点観測としてこの本を開くようになりました。例えば、大学院修士課程でこれからのキャリアに迷っていたときは、自らに与えられた幸運を認識する重要性とそれに伴う責任について、九死に一生を得た登山での滑落事故の経験から語った『転落から高みへ』が、理想の姿と現実の不甲斐ない自分とのギャップに苦しんでいたときには、著名なリーダーも不完全であったことを語る『完璧を求めるな』が心に残りました。

他にも、元民間企業CEOの教授が権力と地位を持った自分の影響力を正しく認識していなかったことで愚かな指示をしたという自らの失敗談を添えて語る『まずい食事と真実』、経営者の決断で人生を変えられる従業員は誰かの父親や母親・息子や娘であることを忘れるなど、そのような従業員の一人であった母親に育てられた教授が語る『サラの物語』、故障によってバスケットボール選手生命を絶たれ、アクシデントの結果としてなった大学教員に天職を見出した教授が、今ここで経験していることには終わりがあることを意識し大切にしろと語る『今という瞬間を生きよ』、不条理な試験の思い出とともに、正解を当てることより限られた情報の中で持てる知識を使ってロジックを組み立てて仮説を立てる経験のほうが実社会では大事だと語る『剥製の鳥』、従業員が貴方のために働くのは権力を持っているからではなくいい将来へ導いてくれると信じるからだと心理学者の教授が語る『なぜ人はあなたのために働くのか』、などの印象的な物語が本書には載っています。

なおこの原稿を書くために久しぶりに読み直しましたが、今の自分に響いたのは最終章の『自分を見失うな』でした。その教授は自分を見失うことなく高みを目指し続けることの重要性を両親から教わりましたが、その両親と同じく「貴方を信じている、貴方なら出来る」というメッセージを学生に送り続けることが、大学教員の仕事だと考えています。